

パレスチナ赤新月社医療支援事業（ガザ地区） 事業開始

国際医療救援部副部長 渡瀬 淳一郎

派遣期間：2019年10月20日～12月21日

派遣地：イスラエル パレスチナ自治区・ガザ

パレスチナ赤新月社と日本赤十字社の2か国間事業として、レバノンのパレスチナ赤新月社病院に対する支援に引き続き、今回、パレスチナ暫定自治区ガザ地区の2つのパレスチナ赤新月社病院（アルクッズ病院、アルアマル病院）において、支援を開始することとなりました。



アルクッズ病院



アルアマル病院

ガザ地区は1948年に多数のパレスチナ難民が戦禍を逃れて流入し、パレスチナ暫定自治区となりましたが、2007年にハマスがガザ地区を掌握、イスラエルとエジプトによるガザ地区住民の移動制限が生じ、以来状況は一気に悪化しました。この状況に加えて度々ロケット弾やドローンによる攻撃があります。今回着任して3週間経過した時、3日間に及ぶロケット弾の応酬があり、



ガザ市内

数十名のガザ市民が命を失いました。ロケット弾の目標は軍事施設が主であることはわかっているとはいえ、発射と着弾の音が断続的に聞こえている間、とても恐ろしい気持ちになりました。毎週末には、自治区とイスラエルの境界において幾多の制限に対する抵抗運動が

度々起こっており、死傷者が生じています。

このような状況下で、ガザ地区の医療施設が重要であることは言うまでもありません。しかし、ガザ地区の医師・看護師に総じて言えることですが、彼らが地区外へ出ることを許可されることは非常に稀であるため、技術や知識のアップデートの機会を得ることは困難です。従って当事業においては、足りないモノの提供ではなく、診療の質改善等の技術支援を予定しています。リサーチの結果、救急の共通診療プロトコールの開発や、重症患者に対する診療手技、看護ケアの改善などを期することとなりました。

期間は2年弱、パートナーのパレスチナ赤新月社としっかり協調し、事業後の確固たる継続性をもたらすことを主眼にやっています。

現地の方々と話していると、どなたもが苦しみとストレスをおっしゃいます。

数十年に及ぶ厳しい移動制限の強制が続く中、変化は極めて乏しいものでした。今なおガザ地区の住民の多くは非常に困難な状況に置かれたままです。

世界の恵まれない人々を支えるため、日本赤十字社の国際支援活動にご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



病院スタッフと



週末の衝突による多数傷病者の対応に備える病院スタッフ